資料１

第３回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会　議事録

日時　平成 23 年 11 月 30 日（水）14：00～16：30
会場　札幌すみれホテル 3 階　ヴィオレ

１　開会案内

２　議事

（1）　前回の審議の振り返りについて
資料１について、事務局から説明

（2）市民会議等における検討結果について
資料２について、事務局から説明

＜内田会長＞
市民参加の取り組みへの出席者は全て違うメンバーなのか。

＜稲木企画課長＞
ワールドカフェは自由参加で多数の参加となっているため、全員の名前は把握していない。市民会議と分野別ワークショップはそれぞれ違った形で募集しているので異なるメンバーになっている。

（3）まちづくりの基本目標・基本的視点について
資料３－１～資料３－７について、事務局から説明

＜内田会長＞
今日１回でこの議論が終わるわけではなく次回も同様に議論してもらうことになる。
概説すると、審議会での意見を括った資料３－２があり、ここで「地域」と「経済」の大きな柱が抽出されている。さらに市民会議からの報告も同様に括りながら論点整理を行い、まちづくりの基本目標を導いている。経済、地域をはじめ、基本目標としての６項目を都市空間が抱え込むような枠組みを採っていると理解している。
さらに、これらの目標を達成するための基本的視点として５つ抽出をしている。多岐にわたっていたこともあり、多少、わかりづらいかもしれないが、基本的には資料３－６に示される目標と視点の枠組みのとおりであろうと思う。
資料３－７にある詳細な内容についての過不足は後ほど、意見をいただくことになるかと思うが、まず、基本目標と基本的視点の方向性や柱立てについて検討いただきたいと思う。

＜金子委員＞
資料について、二つお尋ねしたい。一つは市民並びに道外居住者アンケートの結果のところで人

口減少、少子化・高齢化が重要な課題として挙げられている。審議会の場でも少子化、高齢化については話題に挙がっていたかと記憶している。

一方で、資料３－５、３－６を見ると「高齢化」また、「福祉」という表現が消えている。これはどういう意図なのか。

もう一つは、色々な意見が出てきているのは結構なのだが、おそらく優先順位という考え方が必要になるかと思われる。その際の発想、考え方の根拠を示していただきたい。

＜浅村計画担当課長＞

まず、高齢化に関する記述について、少子高齢化が進むという認識は我々も持っている。将来には、現在のカテゴリーで考える高齢者というのが、人口の３分の１になるという予測を持っている。今の概念で言うところの高齢化は進展するが、それだけで捉えられない課題が出てくると思っている。地域で支え合うという観点でみると、様々な方々が暮らしていけるまちづくりを進めていくことが重要であり、こうした観点では高齢化への対応が抜け落ちているわけではないと認識している。具体的には、基本目標の４番目の「安全・安心」という中で、「誰もが健康で安心して暮らせるまちづくり」というものを掲げており、その中で高齢者への支援、サービスに関する記述は明記している。

二つ目の優先順位については、「地域・コミュニティ」、「経済・雇用」が重要なテーマであると考えている。この視点から重点戦略等を構築していくことを考えたいと思っている。

＜可児政策企画部長＞

少し補足させていただきたい。優先順位の発想というのは、基本目標の構図にもある通り、「地域」と「経済」というのが一つの指標になるかと思われる。ただ、これらは優先的ではあるが広い概念を目標の中で掲げながら、次の重点戦略の中で優先順位を立てながら整理していきたいと考えている。

＜田村委員＞

資料３－５について、経済・雇用、地域コミュニティという２軸がある。地域については市民参加型で町内会的な防犯などの活動をしていく。かたや経済については国際化、グローバル化という視点で、商社の方などが海外投資をやっていく。国際都市になるための戦略ということで、市民目線とは違う要素を入れてやっていくという認識をしているのであれば、それは間違いではないかと思う。すごく大事なポイントは、例えば、発寒の商店街の事例をみると、経済を興して、自分達で条例をうまく使って起業化し、国際的なものも色々な形で呼び込んでいる。市民会議の委員の皆さんのような地域の方々の力が地域と経済に繋がっているということになるのではないか。

今日の資料を見て、過去の総合計画のような印象を受けている。それはなぜかと考えたときに、一般に計画づくりの中では目標、政策、事業という仕立てになっているが、この際に各部局の政策、事業というものを意識してしまうと、資料３－７のように、現在の行政の縦割り的な部分の断片が色濃く残ってしまうのではないか。

私自身には具体的なアイディアがないまま話してしまうが、市民も地域と経済の両方に足を向けていて、国際的な経済にも一町内会、一商店街、さらにそれをやろうとする際の市が応援する仕組

みを作ることが必要ではないか。市の役割というのは税制も含め規制を緩和して、国に対しても無茶振りをして地域を応援していく仕組みを作っていくことなのではないかと思う。

もう一つ、経済的な側面で国際的なものを呼び込んでいく中では、例えば千歳空港の民営化の中でシンガポールの外資が入りたいと思っているようであるが、それは何故かというと、千歳を経由してヨーロッパ等に貨物を運ぶのにちょうど良いということであった。そういったビジネスチャンスがオール北海道の中で来ようとしており、その取っ掛かりの部分をどう捉えていくのかが重要なのではないか。九州の話を聞くと、色々な地域が東アジアと交流しようとする中で、とりあえず自分達は韓国をターゲットにしていると言い切っている。そのあたりに対するコンセンサスをたくさん、いろいろなことを書き込んでいくのではなく、内田会長がおっしゃっていた取捨選択をしていくべきで、現状では詰め込み過ぎな気がする。

＜浅村計画担当課長＞

地域と経済がリンクせずに別物として捉えているかというと、そういう認識は持っていない。表現方法として若干足りない部分があるかもしれないと感じた。グローバルな経済が地域にアクセスすることは十分に考えられるし、地域の活性化、地域コミュニティをいかにマネジメントするかという視点でも経済的な側面が考えられると思っている。しかもドメスティックな視点に留まらずグローバルな経済とのアクセスも意識しなければならないと思う。市民の方々にもそういう意識を持って地域運営をしていく視点も必要であり、どういう表現をすべきかは今後、検討していきたいと思う。

＜高木委員＞

私が違和感として感じていたものが田村委員からの話を聞いて少し見えた気がした。あちこちに色々な言葉が加えられていて、「交流」ということが意識されているかと思われるが、インタラクティブというか、相互に作用するという感覚が欠けていると思った。

例えば、私は田舎に住んでいることもあり、北海道の中の札幌というものを考えることになるが、目線が札幌集中であるように感じている。町村と相互作用して発展するという視点が、地域と経済、高齢者と若者の関係というところでもしっくりいかないものがあると感じている。

＜内田会長＞

田村委員がおっしゃっていた従来のような経済とコミュニティが乖離したものとして認識するという発想は、事務局としては持っていないと理解している。資料にも「地域コミュニティを支える産業の活性化」とあるように、そういう視点が明文化されていると理解してよいのではないか。

北海道における札幌の役割としては、基本的視点として書いてあるかと思う。高木委員がおっしゃっているのは、お題目として挙げるのみではなく、もう少し北海道全体を札幌市がどう見ているかというメッセージをもっと強く発信していくべきだということだと理解している。そういう点は今後、検討していく必要がある。

＜福士委員＞

資料３－６について、まちづくりの基本目標は地域と経済を２本柱とするということ、また、重

点戦略として行財政改革とあるが、持続的なまちづくりを考える上で一番大事なことは経済の活性化であると思っている。

札幌市として経済施策としてどのようなものを打っていくのか、パイが一定のものしかない中でやっていくという手法に加えて、外から入ってくる手法を交えていく必要があるのではないか。

＜可児政策企画部長＞

まさにおっしゃるようなことを重点戦略の中でいかに記述していくかが今後の課題になると理解している。

＜為定委員＞

地域と経済の括り方に関する違和感もあるが、資料３－６を見たときに都市空間の位置付けも気になっている。上の６つの項目についてまちづくりを進めることで実現するのが都市の姿だと理解しているが、それを別途、位置付けている意味は何なのか。ここでいう都市空間とはインフラ等のハードを指すものなのか。

＜浅村計画担当課長＞

都市空間を一つの項目として位置付ける意味合いは、前述の６つの基本目標を達成することを支えるために、必ずしもハードウェアという観点に留まらないが、インフラを中心に都市空間形成を進めることが重要だと考えている。

都市空間には多様な機能があるので、６つの目標を意識した空間形成が求められる。そうした都市空間形成、整備、維持を進める中で６つの目標が実現されるという相関関係になるのではないかと考えている。

＜可児政策企画部長＞

補足すると、例えばコンパクトシティという考え方があるが、街の作りを人口減少に対応していかに考えるか、広い地域に対してどのように再配置していくか、それを大きな視点から考えなければならないと思っている。そういう視点から都市空間の議論をしなければならないと思う。

＜内田会長＞

ハードのイメージというより、次の議題にあるように都市像に関わってくる問題なのではないか。ここに記載されている事柄、施策については広く一般的なものであり、今回のビジョンでは特に地域と経済について強く押し出していくということが特徴になっている。市民及び外の人に対して個別に説明していくことは不可能で、札幌のイメージの中にそれを含んでオリジナリティを発揮しなければ、札幌の計画にはならないと思う。その一つとして可視化された都市空間というものが重要になるのではないか。市民に対して総体のイメージを持っていただいてまちづくりを進める必要がある。空間とテーマを合体させて議論させる必要があると私は理解している。

＜池田委員＞

資料３－５を見ると、やはり総花的で、いかにも行政が考える計画になっていると感じてしまう。

そこで、まちづくりの基本目標の構図として、「経済」を真ん中に持ってくるべきではないか。その周りに「文化」、「環境」、「子ども」などが連携して、それぞれが経済と結び付いている。あえて言うと経済に絞ってみるという発想も大事ではないか。

市民会議の議論を見ると非常に良いキーワードが出ている。これが計画の内容にちゃんと登場して、つまり行政ではない方々の意見というものをフィルターとして加えて、都市空間形成につながるような考え方ができないか。お金がないと何もできないが、ないから諦めるのではなく、その中でも街並みをきれいにし、観光客を呼び込み、市民生活を豊かにしていくことで経済を活性化していくということになる。そういう意味では、１時間じっくり説明を聞いても総花的で、よく分からなかったという印象がある。何かに絞り込みをしていくことが重要なのではないか。

行政以外の方々が考えた市民会議の面白い発想を加えていくことが札幌の街を作り上げていくということを視野に入れて検討していただきたいと思う。

＜内田会長＞

池田委員のおっしゃることはよく分かるが、行政としては思い切って経済に取り組んでいく、そういう意志を込めた図柄が出ている。今まで、こういう図柄は出たことはなかった。従って池田委員の希望は行政として最大限に表現しているとも受け止めることができるのではないか。

同時に、ここは政府ではなく地方自治体であり、札幌市という地域をどうするか、地域がどう生きていくか、底上げしていくための考え方を示すことが行政の役割として一番重要な視点となるのではないか。加えて、これまで真剣に考えてこなかった経済という視点を重視して、２本柱でやっていくというスタンスが示されている。そういう観点では私は今回の事務局の考え方には問題はないと感じている。

＜早川委員＞

様々な意見を聞いていた中で池田委員のお話を聞いていて一つ思ったことがある。

私が考えるまちづくりの基本目標の中心は市民なのではないか。経済は逆に言えば、市民生活、まちづくりを活性化させるためのエンジンになるのではないか。つまり、こうしたフラットな書き方ではなく、中心が市民であり、その周りに様々なテーマがあり、それらをけん引していくエンジンが経済という関係性なのではないか。

総花的に見えるのは、多少の強弱があるにしろ、全ての項目が同じように課題として並べられていることにあるのではないか。それぞれの項目の持つ役割を明確にすべきではないか。

＜内田会長＞

どうやら、皆さんの関心事は資料３－５の構図で、説明を聞いていると資料３－７になると皆さんうんざりしてしまっている。これは行政の仕事なのでしょうがないと思うが、それは割り切る必要があるのではないか。目標のところが我々審議会には最大の関心事で、それを見誤らないように皆さんに議論してほしいというのが私の願いで、齟齬がない、共有化したものにしたうえで審議会は解散したいと思う。

資料３－７の細かいところはそれぞれの専門の委員の皆さんに視点の過不足を議論していただければと思うので、まずは大きな考え方を議論し共有化していきたいと思う。

＜服部委員＞

審議会が始まる際に「選択と集中」というキーワードを出されていたこともあり、自分の頭の中では、何を選択し集中していくのかという視点で見なければならないのだろうと考えていた。そんな中で事前に今回の資料を拝見した際に、「あ、やはり全体のことをやっていくのか」と認識していた。本日の皆さんの議論を聞いて、やはり「地域」であったり、「経済」であったりと、選択と集中を志向しようとしているのだと感じた。

事務局にお聞きしたいのは、市民議論の中で、これからの将来を考えたときに一番大切にしなければならないと感じた事柄は何か。それがもしかしたら大切な視点の一つになるのではないか。

北海道神宮の新嘗祭に参加した際に、既存組織が頑張っていて 70 歳以上の方が大半を占めている実情を目にした。高齢化する中で、その方々の活動を継続していくための担い手が見えない状況にある。新しい担い手がどうやって参加していくか、今回の基本目標の柱である「地域」「経済」を誰が担っていくのかが見えづらい状況にある。それが早川さんもおっしゃっていたように「市民」なのだと思うが、その際に市民とは誰か、それが重要なのではないか。

＜浅村計画担当課長＞

様々な市民参加事業に取り組んできて、例えばアンケートを見ると相対的には「地域」に対してそれほど重視されていないという結果が出ている。その一方で市民会議やワールドカフェ、ワークショップ等で議論し理解を深める中では様々な課題が「地域」に収れんされていることが実感できた。市民の皆さんが身近に感じている福祉や除雪などの課題が多々ある中で、それをいかに解決していくか、そのステージ、フィールドとして「地域」の位置付けが重要で可能性があるのではないかということが見えてきた。まちづくりを進める上で、その部分に対していかに方向性を示すかが我々にとって重要な課題になると考えている。

もう一つ、「地域の担い手」ということでお話しすると、若者の地域貢献・社会参加への意向は見えてきており、それをいかに地域のフィールドに乗せていくかという工夫も必要ではないか。

＜内田会長＞

地域の担い手の議論はあちこちで苦慮しており、行政の様々なセクションでそうした声が拾われつつある。ここからはそれらに対してシステマティックに継続性・方向性を与えていくことが重要になる。個別にあたるのではなく、計画を通してそれらの考え方をどう取り扱っていくべきかを計画の中で受け止めていく必要があると思う。

＜丸山委員＞

今回の基本目標の中で重要とされている経済と地域というものがともに概念として理解できずにいるが、今日の話し合いを受けて、これからの経済、地域の在り方というものを考えるのだと捉えている。「経済」はモノやサービスの交換の仕組みというように辞書的に扱われている。私個人としては交換というよりも循環の仕組みなのだと理解している。「地域」というものは運命共同体というべきだと再確認している。今回の「地域」は一体何かということ自体、様々な捉え方があり、先ほど話があったように、地域というステージという捉え方をするということもあるかもしれない。

札幌市、区、まちづくりセンター規模、それぞれが地域であり、それが対世界という観点からみると何かということも捉え方が変わってくる。地域というものが様々な捉え方がある中でどういう単位を考えていくのかが工夫のしどころなのではないか。

現在の文言として地域、経済が使われていますが、何か新しい発想であるという思いを伝えるべく、新しい言葉を使っていくべきではないか。資料３－６を見ると濃く地域、経済と書かれていて、その次でもまた同じ言葉が使われていて重複している。ここで重複する必要はなく、新たな言葉に置き換えていくべきではないか。

もう一つ、気になることとして、金子委員が冒頭におっしゃったことに関連したことを発言したい。実は、市民会議のまとめ方が私にはしっくりきている。ここでは「全ての市民が」というメッセージが込められており、こういう発想でよいのではないか。敢えて、今回のように「子ども」を特出しする必要があるのかを改めて考えたいと思う。経済産業省の役割がホームページで明確に書かれていて、ここには「多様な主体」とあり、そういった気持ちが納得のいく表現であると思っている。

＜可児政策企画部長＞

「高齢者」「福祉」の視点が出されていないのは、意識的なものでは必ずしもないので、今後、検討していきたいと思う。

＜浅香委員＞

資料３－５を見ると、大きな項目よりも、小さく記載されていることの方が気になっている。「持続可能」という言葉が所々に使われているが、この視点では全ての施策が平均点に終わるのではないかという懸念があり、大ナタを振るって改善すべきことがあるのだと理解している。持続可能という意味合いを教えてほしいことと、現在の総合計画が計画期間である中で、新たにこのビジョンを策定し、どこを改善すべきという認識を持っているのかを聞かせてほしい。

＜可児政策企画部長＞

持続性の意味合いは、大きな成長が見込めない時代にある中、これからの社会を考えるキーワードになると考えている。持続的な取り組みは大ナタを振るうことにはならないかもしれない。今回の目標が総花的であるということに対する問題意識は我々も抱いている。ここに込めている思いとして、計画期間は 10 年間であるが、目指すべき都市の姿はその先のものとして理解しており、そういった意味では 10 年という枠を超えた幅広なものになっている。

一方で、10 年間の取り組みは重点戦略になり、そこでは大胆な選択と集中をしなければならないと認識している。

＜内田会長＞

委員長が言うべきではないが、札幌市が「市」として持続可能なのかということも含めて考えなければならないと思う。10 年を超えた先に札幌市が市として持続できるような、市としての街をずっと持続できるかという危機意識の下で取り組まなければならないのではないか。今の札幌市のイメージを意識していこうという思いを込めて「持続可能」を使っていると理解しているが、持続不

可能な部分もあるはずで、そこは十分に考えなければならないと思う。

＜志済委員＞

これはあくまでもビジョンであり、10 年後を目指すというところで、総花的であり、市民の方々の夢が入っているというところはあるかもしれない。

実際に重点戦略に落として実行可能かどうか、一つ一つが財源の問題や、もちろんすべてを市が丸抱えというわけではないと思うし、それぞれの担い手の役割分担、切り分けが出てくると思う。実行可能な計画を作った段階で、例えばこのビジョンがかなり萎んでしまったり、当初目論んでいたものと全く違う、ということになれば、せっかく色々な声を集めてきた中で説明責任を果たしていかなければならないのではないか。絵に描いた餅にならない落とし方が必要になる。当然のことながら、ここで志向しているすべての事柄を実行できれば素晴らしいことであり、ではどうすれば 10 年後に実際に実現できるかということを委員は議論しなれければならないのではないか。これから専門部会も始めるということなので、このビジョンで目指しているものから逸脱しないようなつなぎ方をしていくべきである。

＜高木委員＞

私が住んでいる黒松内のような街を代表すると、道内の人口構成比が札幌市以外と札幌市とで３：２ということは考えなければならない。その比重は特異的である。農山村地域がへたると札幌は持続できない。札幌が農山村地域と相互に関係し合うことは経済的な観点からも重要になる。

地域の人たちと話すとそれぞれ地域の概念が違うので、ほかの視点を入れないことには共有化できないのではないか。札幌では西区と東区で全然考え方が違い、場所によって感覚が異なる。丸山さんがおっしゃるように、地域と経済では包括的な概念でわかりづらいと思った。

＜星野委員＞

今後の重点戦略に関わる話になるが、市民参加事業を通して出ていた意見は素晴らしいが理想を語るのは簡単だと思っていて、「誰がやるのか」という視点が欠けている。自分たちがやる必要があるのか、誰かがやってくれるという発想なのか。市民に分かりやすく伝えることが重要で、市民が動きやすい環境を作っていかなければならない。市民の意見を拾うだけではなく、それをいかに実現するべきかを議論すべきだったのではないか。具体的な動きに繋がるイベントを展開していく必要があると思っている。自分たちの問題であり自分たちで考えなければならないという意識を持たせるべきである。

基本目標について、内容としては良いと思うが、重点戦略の中でどう加工されるかが重要である。優先順位という視点では、札幌市にとってプラスで伸ばす、マイナスを改善するという二つの考え方があり、その中での優先順位があるのではないか。すぐに手を付けなければならないこと、じっくり取り組んでいくことを区分していく必要があるのではないか。行財政の運営も優先順位が見えないことには方針が定まらないのではないかと思う。

＜近久委員＞

資料３－７は後でしっかり議論するということであったが一言言いたい。経済が中心であるとは

思うが、その際の取り組みとして既存の概念しか書かれていないのではないか。これからの経済として、地産地消などローカルな中でお金を回していくことを考え、組み込んでいく必要がある。食やバイオ、ＩＴと書かれているが、ここにエネルギーという視点を加えてほしい。今までは競争という観点から経済も考えてきたが、それでは持続しないのではないか。持続するためには競争ではないということを視野に入れてほしいと思う。

＜内田会長＞

私もエネルギーという視点は加えてほしいと思っている。

次回また同じ形で議論を深めていくことになるかと思う。

(4) 目指すべき都市像について

資料４について、事務局から説明

＜内田会長＞

これまでの計画の中で都市像は継続的に示されてきている。少し新しい形の都市像を訴えてみたいという事務局からの提案であったが、今の時点でこうした提案に対する考えをお聞きしたいと思う。

＜為定委員＞

見直しというのは文言の見直しではなく、言葉の見直しだと理解してよいか。また、基本目標と整合が図られているべきという観点から言うと、戦略ビジョンの内容が収れんした際に議論すべきではないか。

＜可児政策企画部長＞

我々も同じように考えていたが、最後に議論するとしてもなかなか進まないのではないかと考え、次回以降、少しずつ議論できればと思っている。

＜田村委員＞

「北方圏の拠点都市」に変わる目標を考える際に、「新しい価値を創出する」ということがキーワードになるのではないかと思う。日本政府は経済成長戦略と言っているが、「成長」ということはもうやめて、市民も技術革新も海外の投資家もうまくくすぐるような「新しい価値を生み出す」という視点があっていいのではないか。

＜志済委員＞

論理的ではないのだが、子どもの頃から「北方圏交流」という言葉には馴染みがある。今、グローバリゼーションの中で、「北方圏の中核都市」というイメージは北海道の方以外にはピンとこないのではないか。北方圏で札幌市が独自の共同体を作っていくのか、今一つしっくりこないという、感覚的ではあるがそういうワ―ディングであるのではないかという思いは持っている。

＜金子委員＞

「北方圏」、「生活都市」という枠組みは外向き、内向きという目線なのだと思うが、これと同様の枠組みにするのか、その考え方自体変えてよいのか。「都市生活の質」、「クオリティ・オブ・ライフ」という視点を生活都市に変わるキーワードとして使えないか。

＜可児政策企画部長＞

二つの視点から見た都市像であるという枠組みを採らなければならないとは事務局として必ずしも考えていない。

＜高木委員＞

「若者」という言葉もあるので、「若い人たちが学べる場」、「若い人材が育てられるまち」という意味が北海道全体にとっても意味のあるものになるのではないか。

＜池田委員＞

「夢」、「空間都市」というような夢が語れるイメージを出してもらえば、人が集まってくるのではないか。「夢」というのは重要なキーワードだと思っている。

＜早川委員＞

簡単なキャッチフレーズの提案として、「つながり」ということが内向き外向きに使えるのではないか。それから「挑戦・チャレンジ」という言葉は北海道・札幌らしいと思う。「挑戦」という積極的なキーワードと、「つながり」というしっかりと内側を見たキーワードを使って都市像を描けないかと思っており、市民会議の報告書にも、そういうニュアンスがある。

行政的に堅いイメージで再編する必要がないのであれば、そういう表現もあってよいのではないか。

＜可児政策企画部長＞

表現として、行政計画だから固い必要はないと思っており、むしろ分かりやすく伝わるメッセージであることが重要だと考えている。

＜早川委員＞

そうであれば、今の都市像は印象に残らない。分かりやすく、他の都市にはない、砕けているが頭に残るキーワードが欲しい。

＜内田会長＞

日本を見るのではなく、もっと世界を見たキーワードを考えてほしいと思う。

私からのお願いとして、アジアの都市がメッセージとしてどういうものを持っているか、少し調べて参考にしてほしい。その都市の特徴をとらまえているはずで、そういうノウハウを学びながら参考にすべきではないか。

(5) 専門部会の設置について

資料５－１～資料５－３について、事務局から説明

＜内田会長＞

都市構造専門部会のメンバーはこういう形でよろしいか。

ほかの部会は私が人選することになっているので、構成に異議があれば私の方までお願いしたい。本来であれば、このように部会を設置してしまうと議論がバラバラになる可能性があるので好ましくない一面もあるが、一方では効率よく進めていくことも必要だと思っている。

部会の設置に伴い、スケジュールも若干変更になっているので、こちらも確認していただきたい。

この進め方に特に異論がなければ本日の審議会はこれにて終了したい。

以上